

# TOUR DE HOKKAIDO 2005 NEWS

5th Stage 2005年9月19日発行

## 区間個人順位

順位	名前	チーム	タイム
1	ティロ・シュラー	ドイツ	1:23:15
2	マリウス・ヴィズィアック	NIPPO	+0:00
3	パク・サンバク	韓国	+0:00
4	ダニル・コムコフ	ロシア	+0:00
5	チェン ケイシェン	チャイニーズタイペイ	+0:00
6	綾部 勇成	ミヤタ・スバル	+0:00

## 個人ポイント賞順位

順位	名前	チーム	ポイント
1	マリウス・ヴィズィアック	NIPPO	101
2	エディー・ラッティ	NIPPO	71
3	ティロ・シュラー	ドイツ	70
4	マーク・A・ウォルターズ	カナダ	48
5	清水 都貴	プリチストン・アンカー	44
6	岡崎 和也	NIPPO	36

## 団体総合順位

順位	チーム名	タイム
1	NIPPO	58:26:594
2	愛三工業	+4:31
3	プリチストン・アンカー	+6:29
4	シマノ	+6:47
5	韓国	+8:56
6	ミヤタ・スバル	+9:13
7	キナンCCD	+9:38
8	ロシア	+10:12
9	北海道地域選抜	+12:02
10	日本大学	+14:45
11	ドイツ	+16:24
12	チャイニーズタイペイ	+17:29
13	カナダ	+20:37
14	ラバネロ	+22:32
15	法政大学	+29:53

## 個人総合時間順位

順位	名前	チーム	タイム
1	エディー・ラッティ	NIPPO	19:26:47
2	岡崎 和也	NIPPO	+2:32
3	清水 都貴	プリチストン・アンカー	+2:41
4	狩野 智也	シマノ	+2:56
5	新保 光起	愛三工業	+3:01
6	別府 匠	愛三工業	+3:40

## 個人山岳賞順位

順位	名前	チーム	ポイント
1	エディー・ラッティ	NIPPO	31
2	別府 匠	愛三工業	30
3	新保 光起	愛三工業	8
4	マリウス・ヴィズィアック	NIPPO	7
5	盛 一大	愛三工業	7
6	田代 恭崇	プリチストン・アンカー	7

## 5th.stage シュラー (ドイツ) がステージ2 勝目。NIPPO 各賞総なめ

第19回ツール・ド・北海道国際大会最終ステージ札幌市モエレ沼公園内の道路を使ったコースで行われたクリテリウム。天候は晴れ。スタート時は気温が高く、暑い一日になりそうだった。

昨日までのロードステージを終え、個人総合時間賞トップほぼ確定、山岳賞はすでに決定していたので、この日は、ポイント賞争いが注目された。

注目の1回目のホットスポットはポイントリーダーのマリウス・ヴィズィアック(NIPPO)がトップで獲得。ヴィズィアックが自ら逃げにも乗り積極的な動きを見せた。

やがて風が強くなる。ホームストレートが強い向かい風。リーダー・ジャージのラッティは常に集団先頭付近に位置して走っている。

2回目のホットスポットもポイントリーダーのヴィズィアックが獲得。さらに差を広げた。

途中5人の逃げが決まる。この中にもポイントリーダーのヴィズィアックが含まれている。後方集団はNIPPOがコントロール。

3回目のホットスポット、トップ通過はタエボクユウ(韓国)。先頭集団5人にカナダの選手が1人で追いつき、先頭は6人に。さらに柿沼章(ミヤタスバル)が追いついて、



ツール・ド・北海道訪問3回目にしてついに完成したモエレ山からスタート/フィニッシュ付近を俯瞰する

先頭集団は7人。

いよいよ残り1周。ホームストレート両脇には観客がびっしり詰め掛けて人垣ができて、声援を送っている。

その最後の1周に大落車が発生。30人近い選手が巻き込まれた。ただし、ゴール前の落車のため、集団全員に同タイムルールが適用された。

優勝はティロ・シュラー(ドイツ)。今大会



ツールド恒例の関係者レース、今年は松倉信裕コミセールによってパレードスタートとなった

2度目のステージ優勝となった。

個人総合時間賞1位のエディー・ラッティ(NIPPO)は落車にも巻き込まれず集団でゴールし、その座を守った。NIPPOはラッティの山岳賞に加えて、ヴィズィアックがポイント賞を獲得。さらに4年連続の団体総合時間優勝を果たした。

U23賞は村上純平(鹿屋体育大学)が獲得した。

## Next Year 打倒NIPPOに向けてニューヒーローの出現なるか？

NIPPOは強かった。今年の大会はそのひと言に尽きる。毎年この大会を最大の目標に定め、かつ、きっちりと勝利を収めるNIPPOの選手と大門監督には敬意を表したい。しかし、難を言えば、ラッティと日本人選手の間には力の差がありすぎた。もう少し拮抗していればファンにとっても面白いレースになっただろう。しかし、今回の完敗は私たち日本人に一層の精進を促すメッセージだ。この経験を謙虚に受け止め成長の糧としよう。

一方、優勝候補と目された有力選手たちが精彩を欠く中で、若手の活躍が光ったのも今回の特徴だ。プロローグで圧勝した盛一大(愛三工業)、個人総合3位の清水都貴(プリチストン・アンカー)はともに80年代生まれ。彼等に限らず若い選手の活躍は、新しいヒーロー

が確実に育ってきていることを証明した。また、第3ステージ3位の島田真琴(法政大学)をはじめ、学生の活躍も大会を盛り上げてくれた。学生でありながらプロ選手と互角の勝負を挑む姿には拍手を送りたい。無謀といわれても挑戦しなければ成長もないのだ。今年は力尽きてちぎれていった選手たちが手ごわいライバルとなる日も遠くはないだろう。

若手とはいえないかもしれないが、米山一輝(ラバネロ)のプロローグ4位も新鮮だった。伸びしろがあるうちは、年齢は関係ないということだろう。他のベテラン勢も、あらたな一面を開拓して私たちを驚かせてほしい。

ひとつの勝利の影には、常に多くの犠牲が隠れている。だから勝利は美しく、だからレースは美しい。美しいレースで、また会おう！



個人総合時間賞と山岳賞、ポイント賞に加えて区間3勝を挙げた、いわば無敵のチームNIPPO